

天保十四年の キャリアオーバー

五十嵐貴久

第三回

第二幕

暫へびぼし

一

鐘かねが乱打されるような音に、痛いたえ、と團十郎だんじゅうろうは頭を抱えた。二日ふつか酔よいである。

(安酒のせいだ)

畳たたみの上に何本もの貧乏徳利びんぼうとくりが並び、林を作っている。酒には強いつもりだったが、これほど酷ひどい二日酔ひよいは初めてだ。

全体が虫歯になったように痛む頭を無理やり上げると、談志だんしがうつ伏せで倒れていた。死体かと思まごうほど、まったく動かない。そりゃそうだ、と團十郎は畳に手をついてふらつく体を支えた。

夜明けまで差し向かいで飲んでいたので。何もかもが歪ゆがんで見えた。貧乏徳利を数えると、二人で二升にしやう以上である。覚えているのは、談志と肩を組んで土間どまに向かつて放尿したことだった。そこから記憶はぶつとりと途切れている。

談志は二十歳ほど年上だ。酔い潰れるのも無理はない。團十郎自身、自分が半分死んでいるような気がしていた。ため息をつくとき、それだけで頭痛が酷くなった。

起きたのかい、と外からお葉ようが入ってきた。手に二本の貧乏徳利を下げて、明るい笑みを浮かべている。

迎むかえ酒さけは勘弁かんべんしてくれと手を振ると、水だよ、と徳利を畳の上に置いた。すまねえなと片手で拌み、そのまま口をつけて喉のどに流し込んだ。

「うめえ。酔い醒さめの水、値千金なりつてな。お葉さん、師匠は生きてるのか？ うんともすんとも言わねえぞ」

鼻提灯はなちようちんが大きくなったり小さくなったり、とお葉が談志の顔を覗のぞき込んだ。

「生きちやいるんだらうね。まったく、年寄りの冷や酒さけだよ。調子に乗って酔っ払って、怒鳴うたったり謡うたったり。いくら大家おおやだからって、近所迷惑たなごしてもんじゃないの。後で二人で店子たなごに謝りに行きなよ。嫌だねえ、本当に」

そう言いながら手早く薄い座布団を二つに折って、談志の頭の下に差し込んだ。口うるさいが、気性は優しい娘だと團十郎はつぶやいた。父親の柳亭種彦りゅうていしゅんげんも酒呑みだったというから、酔っ払いの扱いは慣れていろいろだろう。

「それで、あいつはどこに行った？」

二合の水を胃の腑ふに納めると、ようやく頭痛が収まってきた。お葉が指した先に目をやると、鶴松つるまつが頭から土間に突っ伏していた。まるで土下座である。その下には二人分の小便が溜まっているはずだが、お葉には言えなかった。

猪口ちよこに一杯か二杯か、それぐれえしか飲んでなかったじゃねえかと言うと、酒にはからつきしなんだよ、とお葉が苦笑いを頬ほおに浮かべた。

「あんたと師匠が飲んでいる間、ずっと死んだように寝てたけど、朝になったら土間と外の廁かわやを行ったり来たり……来月の今頃、あたしの頭は真っ白になってるだろうね。世話が焼けるよ、本当に。情けないったらありやしない。男のくせに酒も飲めないのかいって」

「お葉さんは酒飲みが嫌いなんじゃねえのか」

そうだけど、とお葉が渋い顔になった。

「でもねえ、あんまり弱いつてのもどうかと思うよ。猪口一杯で引っ繰り返るなんて、みつともないだろ？ 奈良漬けを食べても倒れ

ちまうんだから、手間ばっかりかかって……一番困るんだよね、こういう人が」

愚痴めいた言葉が続いたが、どこか嬉しそうである。生まれつきの世話好きなのだろう。楽しそうじゃねえかとからかうと、猪口が二つ飛んできた。

腹が減ったな、と團十郎はしゃっくりをした。水を飲んだため頭痛は収まったが、今度は腹の虫が騒ぎだしていた。

「二日酔いなのに、腹が減ったって？」

昔からそうなんだ、と團十郎はうなずいた。理屈はわからないが、深酒をした翌朝は妙に腹が減る。今なら泥団子でも食えそうだ。

「み……水を……水を一杯ください」

土間から蚊の鳴くような声があった。はいはい、と大きなため息をついたお葉が貧乏徳利を持っていくと、鶴松が顔だけを上げてゆっくり水を飲んだ。

「ああ、七代目。おはようございます」

おはようじゃねえぞ馬鹿野郎、と團十郎は外を指さした。

「見ろ、お天道様はとつくに上がってらあ。もう昼時だ。おれと師匠はともかく、おめえのぎまったらねえな。情けない野郎だ。もうちっと酒の修行をしろ」

体が受けつけなくて、とその場に胡座あぐらをかいた鶴松が辺りを見回

した。

「いや、生き返ったようです。どうです、このまま蕎麦そばでもたぐりに行きませんか。七代目も酷い顔をしてますが、蕎麦なら胃の腑に入るでしょう」

量を飲んでゐるわけではないから、酔いが醒めれば普通に腹が減るのだらう。いいねえ、と團十郎は立ち上がった。

「師匠のことは放っておきやあい。一刻（二時間）ほどは目を覚ましそうにねえ。今も話してたんだが、二日酔いの朝は迎え酒より迎え飯が食いたくなるたちでね。今なら何枚でもせいろが食えそうだ」

一緒に行かねえかと誘ったが、二人で行つといで、とお葉が首を振った。

「師匠のことはあたしが見てるよ。本当に男つてのは、どいつもこいつもどうしてこんなに世話が焼けるかね」

違えねえちげ、と團十郎は筵戸むしんどをくぐって外に出た。今日は暖かいですね、と鶴松が子供のような笑みを浮かべている。頬の辺りにうっすら濡れた跡があったが、團十郎は何も言わなかった。

神田かんだは蕎麦の名所である。江戸の「けんどん蕎麦切り」が初めて登場したのは寛文四年（一六六四）頃と言われるが、神田はその発祥の地であった。

喜多村信節きたむらのぶよの「嬉遊笑覧きゆうしやうらん」には、現在の蕎麦の原型である「二八蕎麦」の蕎麦屋が神田にあったと記されている。享保きやうほうの頃までは屋台が主だったが、天保期てんぽうに入ると大店おおだなも増えていた。

「おれは蕎麦っ食いでね」鶴松と並んで歩きながら、團十郎は左右に目をやった。「一年中食つてもいいぐらいだ……どこまで行くんだ？ それに、おれは銭を持ってねえぞ」

行きつけの店があります、とうなずいた鶴松つるまつに続いて四町ぢやう（約五百メートル）ほど歩くと、黄ばんだ暖簾のれんのかかった蕎麦屋が見えてきた。筍蕎麦たけのこです、と鶴松が暖簾をくぐった。

そんな屋号やごうは聞いたことがねえと首を捻ひねった團十郎だんじやうに、菽蕎麦やくぼうは知っているでしょう、と座敷ざしきに上がった鶴松がせいろ二枚と奥に向かつて注文した。

「知らねえはずねえだろう。菽すなばか砂場さらしなか更科さらしなか、江戸の町で蕎麦と言やあ、その三つだ」

藪に生えてる筍蕎麦という意味だそうです、と鶴松が店の中を見回した。客は他にいない。

藪医者つてのは聞いたことがあるが、と團十郎は欠伸あくびをした。

「なるほどな、藪蕎麦ほどじゃございませんつてことか。洒落しやれが利きいてやがる。それにしても、昼時だつていうのに、客が一人もいねえつてのはどうなんだ？」

腰の曲がった老婆ろうばが奥から出てきた。盆に湯呑みを二つ載せていたが、手が激しく震えている。

いらっしやいと頭を下げて二人の前に湯呑みを置いたが、茶はほとんどこぼれていた。

とんでもねえ店に連れてきやがったな、と團十郎は顔をしかめた。「客がいねえ訳がわかったよ。あれが看板娘だとしたら、蕎麦を茹ゆでているのはしわくちやな爺さんだろう。蕎麦つてのはな、腰がなきや駄目だ。伸びきった蕎麦を食わせようつてのか？」

日によつては美味しい時もあります、と鶴松が言った。参ったねとつぶやいて、團十郎は残つていた茶で唇を湿らせた。

「まあいい。おめえがこんな店に連れてきた訳もわかつてる。昨日の話の続きをしようつて魂胆こんたんだな？」

ここなら聞き耳を立てる者はいませんから、と鶴松がうなずいた。その前にひとつ聞いておきたいことがある、と團十郎は鼻の頭を親

指でこすった。

「あのお葉って娘だが、おめえとできてるのか」

何てことを言うんです、と鶴松がいきなり立ち上がった。酔いはとつくに醒めているはずだが、顔が真っ赤になっている。

「わ、わたしとお葉さんは、七代目が思っているような間柄ではありません。ご、誤解です。いや、もちろん、お葉さんの身の上には同情しています。父親を鳥居に殺されたも同然です。可哀想じゃありませんか。ち、力になりたいと思っていますが、それだけです。

決して、断じて、そのような邪まなよこしまことは何ひとつ考えていません」
おつむりは悪くねえようだが、嘘は下手だなと團十郎は唇を曲げて笑った。

「昔から言うじゃねえか。可哀想だは惚れたってことよ。おめえらの邪魔立てする気なんかねえが、師匠と四人で鳥居いしゆぼに興味晴らしをしようって言うんなら、その辺りははっきりさせておかねえと、話の通りが悪くなるから聞いたままでだ。気にすんな、とにかく座れっ
っ」

何を言ってるんです、と鶴松が握った拳で何度も額ひたいを拭ぬぐった。

「お、お、お葉さんとは談志師匠を通じて知り合っただけで、つまり、そういうことなんです。いや、だからといって、その、お葉さんのことを、何と言うか……」

二人の間にぬっと腕が突き出された。せいろを掴んだ老婆の手が震えている。慌てて受け取ると、ごゆっくりとだけ言って下がっていった。

「わかったわかった、とにかく食おう。昨日の続きの方が気になる。食いながら聞こうじゃねえか」

つゆをひと口啜ると、意外に味は良かった。かなり薄味だが、出汁が利いている。

江戸っ子はつゆをほとんどつけずに蕎麦をたぐるのが定法だが、店によって多少異なる。藪の蕎麦はつゆが濃いので、どっぶり浸けると味わいを損なうから、先だけをちよんとつけて喉越しを楽しむのが粋である。

だが、比較的薄味の更科の場合、十分につゆに浸した方が、つゆと蕎麦の味を両方楽しめる。筍蕎麦のつゆは更科に近かった。

「去年の春、富籤の禁令が出たのはご存じですか」

鶴松が箸で山葵をつゆに溶きながら言った。誰だって知ってるさ、と團十郎は鼻を鳴らした。

* * *

富籤の原型はおみくじであった。

最も古い富籤は現在の大阪府箕面市にある灌安寺みのおで行われた箕面富だが、賞金ではなく、籤が当たった者に御守りが与えられるというだけのものだった。現代で言えば、おみくじの大吉を引いた者に景品を渡す、ということになるだろうか。

初期こそそのような形だったが、すぐに御守りではなく、賞金が出るようになった。

システムとしては現在とまったく同じで、富札を大量に売り出し、そこから当たり籤を引いた者への賞金を支払い、それ以外は主催者の利益となる。この構造は賭博とほぼ同じである。

古来より、為政者いせいしやは賭博を危険なものと認識していた。現在、IR法案、いわゆるカジノ法案が国会を通過しているが、最後まで問題となったのはギャンブル依存症対策である。

賭博には人間の射幸心しゃこうしんを煽る一面があり、真面目に働くより、楽で簡単に大金が手に入るとなれば、勤労意欲が削そがれるのは当然だろう。

賭博にふける者が増えれば、その分生産性が減る。一度取り憑つかれたら病み付きとなる。

ギャンブル依存症は病気であり、治療には時間と多額の費用がかかる。いずれも為政者にとって重要な問題である。

江戸時代にギャンブル依存症という考え方はなかったが、依存

している者は少なくなかった。幕府も賭博の害悪をわかっていたため、たびたび富籤を禁止している。

富籤に限らず、あらゆる博奕ばくちを幕府は取り締まったが、ギャンブルは人間の心の深い部分に根差すもので、それだけの魅力があるのも確かだろう。現代でも闇カジノの取り締まりは難しいが、当時の警察力ですべての博奕を禁ずることはできなかった。

特に富籤は庶民にとって最も身近で、気軽に楽しめるギャンブルだった。それだけに禁令を出しても完全に廃止するのは困難であった。

そのような現実を直視し、富籤を公営ギャンブルにすることで問題を解決しようとしたのが八代将軍徳川吉宗である。

享保の改革において、吉宗は富籤の公営化を図った。税收を増やすという狙いが吉宗にはあったのである。

前にも触れているが、寺社奉行の管轄下で護国寺ごこくじに富籤興行を認可すると、大変な人気を呼んだ。吉宗が考えていた通り税收は増えたが、別の問題が起きていた。

吉宗としてはあくまでも護国寺限定というつもりだったが、幕府公認となったことで、江戸内の寺社から富籤興行の出願が相次いだのである。護国寺だけを特別扱いするのは公平と言えないと有力寺社から強い抗議もあった。幕府としても認めざるを得ない。

明治五年の「寺院明細帳」によれば、当時の東京府の寺院は二千四百八十六あった。享保の頃の正確な数は不明だが、二千を越えていたのは間違いない。

江戸にある二千の寺すべてが富籤興行を開くとなれば、ひとつの寺が年に一度だけだとしても、毎日五、六寺で興行が行われることになる。これでは江戸の町民すべてがギャンブル依存症になってもおかしくない。

同時に、全国の主だった寺社からも富籤興行の認可を求める声が殺到さつとうしていた。娯楽の少ない時代である。日本中の人たちが富籤を話題にするようになる。それに応えて当たり籤の金額も凄まじい勢いで高額化していった。

あまりの過熱ぶりに、吉宗はすぐ方針を改め、さまざまな規制を行ったが、一度認可された寺社は既得権益を主張した。公平に扱うためには全廃する以外ないのだが、寺社側には古刹修復こさつしゆふという大義名分がある。

財政に余裕がなかった幕府としても、税金をみすみす捨てることはできない。結局、富籤興行の日を限定する以外、手の打ちようがなかった。

その後幕府は富籤の禁止と認可を繰り返すことになる。禁止期間が長いほど、再開の認可が下りた時は爆発的に流行した。

江戸期を通じ最も隆盛りゆうせいしたのは、十一代将軍家斉いえなりの文化文政期だったが、天保年間に入っても、ブームは続いていた。享保期から数えると、七度目の大流行である。

だが、天保の改革を主導していた老中ろうじゆうの水野忠邦みずのただくには、富籤を賭博と規定し、段階的に規制を厳しくしていった。全国での富籤興行を全面的に禁止したのは、天保十三年三月のことである。

そのため、一時的に富籤ブームは沈静化したが、財政難もあり、その後特例として江戸府内の大きな寺社にのみ、富籤興行の認可が下りるようになった。徳川家の菩提寺ぼだいじである寛永寺かんえいじその他、有力寺社の要請を撥ねは付けることは、幕府にもできなかったのである。

* * *

「老中水野忠邦の意を受け、富籤興行の禁令を出すために動いたのは鳥居耀蔵とりい しょうざうですが、特例を認めさせたのも鳥居の進言があったからこそです」

寛永寺かんえいじ、芝増上寺しばぞうじようじ、浅草寺せんそうじ、護国寺、成田山深川不動尊ふどうせん、高輪泉岳寺たかなわせん、池上本門寺がくじ、と鶴松が指を折った。

「その他、合わせて二十ほどの寺が、年に二回という縛りこそある

ものの、富籤興行を開いています。そのために大きく変わったことがあります。何だと思えます？」

さあな、と團十郎は蕎麦をたぐった。博奕は好きだが、富籤は性に合わない。それほど興味もないので、詳しい事情は知らなかった。

「文化文政期には、江戸中の寺社で月に百回以上の富籤興行が開かれていました」

鶴松が鼻の付け根を揉んで顔をしかめた。山葵が利いたのだろう。

「それが月数回に減ったのです。一度の富籤興行に集まる客が、何十倍にも増える理屈はわかりますね？ 売り出す富札の数も今までの比ではなく、数万枚ということも珍しくなくなりました。当然ながら、褒美金（賞金）も高くなる一方です。師走（十二月）に湯島天満宮で開かれる富籤興行では、ついに千両富が行われるそうです。売り出される富札は、噂では六万枚とか」

千両、と團十郎は蕎麦を丸呑みにした。幕府公認の富籤興行はそれが最後になります、と鶴松が言った。

「湯島天満宮以外でも、千両富は何度か行われたことがあります。どう考えても法外です。幕府も寺社も客も、最後に一発大花火を打ち上げようということなのでしょう」

どうもおめえの話はまだるっこしい、と團十郎は蕎麦湯を頼んだ。

「だから何だっていうんだ？」

陰富は実際の富籤興行がなければ成り立ちません、と鶴松が宙で箸を振った。

「考えてみてください。どんな陰富の胴元でも、六万枚もの富札を用意することはできません。売りさばくのは、もっと難しいでしょう。博奕とはいえ、いや、博奕だからこそ、公正でなければ客は集まりません。胴元が当たり籤を決めるような陰富に加わる客はいませんよ」

そりやそうだなとうなずいた團十郎に、今度の富籤禁止令は十二代將軍徳川家慶様自らの沙汰によるものです、と鶴松が届いた蕎麦湯を猪口に注いだ。

「將軍の命ですから、しばらくの間禁令の撤回はないでしょう。つまり、陰富の胴元たちにとって、師走の湯島千両富こそ、最後の稼ぎ時となるというわけです」

鳥居もその一人か、と團十郎はため息をついた。

「蝮まむしにとつては大損だな。ざまあみろ、金がなくなりや、あんな妖怪野郎の下につく奴はいなくなる。せいせいすらあ」

鳥居を侮あなづってはいけません、と鶴松が憂鬱ゆううつそうに言った。

「金のために魂を売った男です。金のためなら何でもするでしょう。あの男は金に取り憑かれた亡者なのです」

奴に何ができるって言うんだ、と團十郎が蕎麦湯で薄めたつゆを

飲んだ。

「やっぱり、ちっと薄味だな……富籤興行が禁じられちまえば、陰富も終わるしかねえ。そればつかしはどうにもならねえだろう。お天道様が西から上がったって、無理なものは無理さ」

昨日言っただけです、と鶴松が顔を上げた。

「鳥居の陰富には、莫大な金子が賭けられています。鳥居は胴元として場を提供するだけで、一割の寺銭を手にすることができました。それで十分だったのです」

野郎は賢いな、と團十郎はぼつりとつぶやいた。

「おめえの言う通りだ。胴元が下手に欲をかくと、どんな賭場だって閑古鳥かんこどりが鳴くようになる。目先の利とくじゃなく、長い刻ときをかけて絞り取っていくのが、間違いない唯一の方法だ。わかっているも、半端なヤクザ者にはできねえ。連中は我慢が利かねえからな。その辺り、鳥居の野郎は格が違う。頭がいいのは認めるしかねえだろう」

陰富に手を染めて十年、と鶴松が両手の指を順に折っていった。

「あの男は鉄のような自制心で、金子の動きを管理していました。寺銭として一割を取り、それ以外は当たり籤を買った者への褒美金や、酒や馳走などで場を賑やかすために使っていたんです。それでも大金が残りました。なぜなら、陰富とは当たらないものだからで

す」

「違えねえ、と團十郎はうなずいた。

「おれは富籤が嫌いだね。ありやあ、運否天賦うんぶてんぶの博奕だ。こつちができることは何ひとつねえ。祈るぐらいが関の山だ。他人任せつてのが、おれは一番嫌いなんだよ。おまけに、めつたに当たりやしねえ。どこが面白いのか、さっぱりわからん」

寺社によって違いますが、と鶴松が懐ふとろから帳面ちようめんを取り出した。

「小さな寺でも、数千枚の富札を売りに出します。定法通り突き富を百回繰り返し、一番、十番、二十番と十番ごとに褒美金を出すとしても、結局当たり籤は十枚だけです。しかも褒美金が高いのは、一番札とと留め札ふだの二枚だけ。もちろん、当たれば大金が入りますが、何千枚にたった二枚の当たり籤を引くのは、どう考えても簡単ではありません。湯島千両富のように、六万枚もの富札を売る富籤興行ならなおさらです」

鳥居の陰富に加わってる連中がこの十年で富札を買った金子は、鳥居が取り置いていると言っていたな、と團十郎は鶴松の目を見つめた。

「おめえの算盤そろばんじゃ、百万両以上になつてははずだ。それを奪つちまおうつて狙いはわかるが、その前にひとつ教えてくれ。富籤興行が終われば、陰富も終わるしかねえ。その時、鳥居の手元にある百

万両はどうなるんだ？」

さすが七代目、と鶴松が指を鳴らした。

「目の付け所が違います。何しろ百万両です。鳥居は胴元で、その立場は変わりません。百万両を自分の懐に入れることはできないのです」

百万両が入る懐があるなら見てえもんだと言った團十郎に、冗談はともかく、と鶴松が話を続けた。

「鳥居の手下で葦いひの茂吉もきちという男がいます。もともと林家に仕える下男で、算盤が達者だったので金子の勘定を任されていたのですが、四年前、十両の金をくすねたため、袋だたきにされた揚句、右腕を肩から落とされ、江戸から追い払われました。鳥居の陰富を調べていた養父が茂吉の噂を聞きつけ、どうにか捜し当てました。上総国かずさのくにで百姓ひやくしやうになつていた茂吉は鳥居を恨んでいるはずですから、知ってることは何でも話すだろうと養父は考えたのです」

「茂吉って野郎は、全部ぶちまけたのか？」

詳しいことは何も、と鶴松が肩をすくめた。

「茂吉は金子番をしていただけで、陰富そのものには深くかわわっていなかったのです。ただ、鳥居が陰富について最初から出納帳すいとうを作っていたことがわかりました。今まで、誰が、いくら富札を買っていたのか、払い戻しはいくらだったか、鳥居はすべての数字を出

納帳に残していたのです」

「細っけえ野郎だな……何のためにそんなものを？」

「いずれ富籤は禁止になる、と鳥居は客たちに話していたそうです。その時には、取り置いている金子を、客が支払った額に応じて返すと約していたのを聞いたと……出納帳はそのためのもので、だからこそ客たちも陰富に大金を投じることができたのでしよう」

怪しい話だな、と團十郎は煙管きせるを取り出して口にくわえた。

「百万両だぞ？ そんな大金を鳥居がただで返すか？」

返すはずがありません、と鶴松が深くうなずいた。

「誰でも百万両には目が眩くらみます。金の亡者で、妖怪に成り果てた鳥居ならなおさらです。死んでも返したくないでしょうし、骨の一本になっても、千両箱にしがみつくでしょう」

野郎ならそうだろう、と團十郎は煙を吐いた。五年前、鳥居の陰富に新しい取り決めが加わったそうです、と鶴松が吹き付けられた煙を手で払った。

「取り決め？」

その頃、鳥居が取り置いていた金子は五十万両を越えていました、と鶴松が言った。

「どこの大名か旗本か、それはわかりませんが、取り置き金をどうするのか、と言い出した者がいたのです。鳥居の陰富では百倍返し

が定法ですが、千両で富札を買い、それが大当たりの留め札になっても、十万両にしかありません。それでは面白くないという言い分に、毎年師走に開かれる湯島富籤で留め札を当てた者に、取り置いている金子を総返しすると鳥居が約したと、茂吉は養父に話してました」

総返しつてのは、と團十郎は腰を浮かせた。

「今まで取り置いていた金子を、全部渡すつてことか？」

小さくうなずいた鶴松が、懐から汚れた巾着を取り出し、一文銭を三十二枚置いた。

「二八蕎麦ですから、二と八を掛けて十六文。二人分で三十二文。よくできてますね」

煙管の代わりに黒文字をくわえ、團十郎は鶴松に続いて店を出た。

今日は暖かいですね、と鶴松が大きく伸びをした。

三

少し歩きましょう、と鶴松が歩を進めた。浪人とはいえ、さすがは武家の出だ、と團十郎は後ろ姿に目をやった。

「足腰のさばきで、や、っ、と、う、を、や、つ、て、た、の、が、わ、か、る、。流、派、は、ど、こ、だ、？」

神道無念流しんどうむねんりゅうです、と鶴松が答えた。

「自慢できるほどの腕ではありません。長くやっていれば、型は自然と身につきます。あまり買いかぶらないでください」

買いかぶつちやいねえ、と團十郎は首を振った。己は真剣を握ったことさえないが、歌舞伎役者として殺陣たての稽古けいこは熱心にやってきたつもりだ。

下手な剣術使いより、技だけなら巧みだろう。その團十郎の目から見ても、鶴松の技量は相当なものであることが窺うかがわれた。

積もり積もって百万両か、と謡うように團十郎は言った。

「つまりこういうことだな？ 今、鳥居の手元には百万両の取り置き金がある。師走の湯島千両富で、突き留の当たりくじを引いた者が、その百万両を総取りする。誰も当たらなかった時は、今まで使った金子の額に応じて払い戻す」

そうです、と鶴松がうなずいた。團十郎より少し背は低いが、足は速かった。

「どちらに転んでも、鳥居の損にはなりません。ですが、目の前にある百万両をむざむざ他人の手に渡すことなど考えられません。一文だつて惜しむような男ですからね。来月、師走の湯島千両富で陰富は最後です。どんな手を使っても百万両を我が物にしたいと、鳥居なら必ず考えるでしょう」

千両富で突き留の当たり札を手にし、百万両を我が物にするつもりだと」

言い切るじやねえか、と團十郎は鼻から息を吐いた。

「どうしてそんなことが言えるんだ？ おめえと鳥居は違う。奴が何を考えてるか、わかるって言うのか？ 自信たつぷりの様子だが、それはちよいとおかしいだろう」

わたしは決して聡い男ではありませんが、と鶴松が道に生えていた薄の穂を抜き取った。

「粘り強く考えることはできると思っています。一年、考えて考えて考え抜きました。わたしが鳥居だったらどうするか、それだけを考えていたと言ってもいいほどです。鳥居が百万両を客たちに返すことなどあり得ません。どんな手を使っても、必ず留め札を手にし、定法に則る形で百万両を己のものにするでしょう。それなら客たちも諦めるしかありません。彼らを敵に回すこともないのです」

「野郎は一体どうするつもりなんだ？」

刻は余るほどあります、と鶴松が歩きだした。

「すべてお話ししますが、場所を変えましょう。その方がわかりが早いはずです」

勿体をつけやがると唾を吐いて、團十郎は後を追った。ひんやりとした風が吹き始めていた。

四

半刻（一時間）ほど歩いたところで、鶴松が足を止めた。南町奉行所じゃねえか、と團十郎は囁いた。正面に大きな門があり、二人の武士が立っている。

目まぐるしくていけねえ、と團十郎はつぶやいた。鳥居を殺めるため、この門を見張っていたのは昨日のことだ。

鶴松に当て身を食らい、気を失った。目が覚めると、これ以上ないほどの貧乏長屋に寝かされていた。

いつの間にやら、鳥居への恨みを晴らすため、仲間を引き入れられている。危ない橋を渡っているとわかってはいたが、どこかでそれならそれでいいと思っている自分がいた。

中心になっているのは、目の前にいる矢部鶴松だ。頭はいいようだし、機転も利きそうだ。だが、どこか抜けているところがある。

鳥居への恨みを晴らしたいと考えているのはわかるし、それは自分も同じだ。ただ、こいつ一人では無理だ、とも思っていた。

おれがいなけりや駄目だ、と思わせる何かは鶴松にはあった。歩きながら話しましょう、と鶴松が背中を押した。

「立ち止まっていると妙に思われます……奉行が家族と共に奉行所

内で暮らしているのは知ってますか？」

おれを何だと思つてやがる、と歩きながら團十郎は唸った。

「七度目市川團十郎だぞ？ 江戸っ子でそれを知らねえ奴がいると思つてるのか？」

それなら話が早い、と鶴松が微笑を浮かべた。

「養父が南町奉行を任じられたのは天保十二年（一八四一）四月末、職を解かれたのがその年の十二月ですから、短い間でしたが。わたしは奉行所に住んでいました。中の様子はすべて知っています」

ここがおめえの実家つてことか、と團十郎は奉行所を見つめた。住んでいただけです、と鶴松が笑みを濃くした。

「ここから見ても全体はわかりませんが、総坪数二六一七坪とかなかの広さです。わたしたちが住んでいたのは奥にある私邸で、奉行所とは廊下で繋がっています。奉行所の建坪は五八〇坪と聞いていますが、造りは簡単です。奉行をはじめ、役人が訴状を吟味する役所と、砂利敷きのお白州しらす、そして処分が決まっていけない者を入れておく牢があるぐらいです」

「牢屋敷は小伝馬町こでんまちよにあるんじゃないかねえのか」

あそこは重罪人のための牢屋です、と鶴松が眉をひそめた。

「何度か養父に連れられてわたしも行きましたが、文字通りの地獄ですよ。陽も差さず、汚穢おわいの臭いがして、病人だらけです。奉行所

の牢は刑が決まっている者や、怪しいと与力よりきや同心が睨にらんだ者を留め置いているだけの場所です」

こんな感じでしょうか、と鶴松が懐から取り出した筆で帳面に何本か線を引き、丸で囲った。器用なもので、どこに何が建っているか、大体のところが團十郎にもわかった。

「鳥居が陰富の賭場として使っていたのは、奉行所東側の支度部屋したくです」

「支度部屋？」

お裁きのための書き物や、日本、唐国からくにのさまざまな書籍が置かれています、実際のところ休憩所ですと鶴松が言った。

「同心たちがしょっちゅう昼寝をしていましたよ。何しろ、この広い江戸府内を与力二十五騎、同心百人で受け持っているのですから、休みもろくにありません。寝るのも仕事のうち、と養父はよく話していました」

一瞬懐かしそうな表情を浮かべた鶴松が先を続けた。

「支度部屋は二棟が続き部屋になっています。どちらも、二、三十人ほどなら余裕で入れます。鳥居がどちらかを賭場に使っていたのは間違いありません。床下には蔵があり、そこに鳥居は千両箱を取り置いているでしょう。百万両といえは、千両箱で千箱ですからね。重さもありますから、下手に積み上げることもできません。床下の

蔵なら、その心配はありません。暮らしていたからわかりますが、他に千箱の千両箱を置く場所はないんです」

千両箱は縦一尺五分(約四〇センチ)、横三寸九分(約一五センチ)、深さ三寸六分(約一二センチ)、その重さは一貫三斤(かん きん)(約六キロ)である。

天保小判は一枚三匁(もんめ)(約九グラム)だから、千両でおよそ二貫二斤(約九キロ)、合わせて三貫五斤(約一五キロ)となる。何十箱も積み上げれば、場合によっては床が抜けても不思議はない。

ありやあでけえからな、と團十郎はうなずいた。江戸一の歌舞伎役者、七代目市川團十郎は千両役者である。当然、千両箱を見たことがあった。その重みはよくわかっている。

「蔵つてのは何だ？」

「火事が起きた時に、訴状や吟味のための書類を投げ込んでおけば、火難(まぬが)を免れます。そのため蔵で、めったに使うことはありません。鳥居もうまいところに目を付けたものです」

人目につかないように千両箱を運び込むのは大変だっただろうな、と團十郎はうなずいた。

「それはいい。おめえの言う通り、奉行所の床下の蔵に千箱の千両箱があるんだろう。だが、どうやって盗み出すつもりだ？　ひと箱三貫五斤だぞ。おれだってひとつ抱えて持ち出すのがやっとだろう。」

こっちは四人で、一人は爺さん、もう一人は娘っ子だ。おれとおめえの二人で盗み出すとしたら、一日あっても足りやしねえよ」

盗むつもりなどありません、と鶴松が首を振った。

「七代目が留め籾の当たり札を持っていけば、百万両は総返しされます。鳥居が決めたことですからね。誰にも止められることはありません。堂々と門から出てきてください。運び出すための人夫は、わたしが手配しておきます」

さっぱり話が見えねえ、と團十郎は大きな顔の前で手を振った。

「何の話をしてやがるんだ？ 鳥居の陰富の客は、大名や大身たいしんの旗本御家人、要は身分のある武士なんだろ？ 自慢じゃねえが、おれは江戸四方所払いの罪人だぞ。本当だったら、江戸の町に足を踏み入れることだって許されねえんだ。そんなおれに南町奉行所の中に入って、陰富に加わってこいとぬかしてんのか？ 馬鹿も休み休み言え。捕まったらどうなると思っただやがる」

客は武士だけではありません、と鶴松が團十郎の顔を見つめた。

「鳥居は裕福な町人、そして僧侶も客にしています。七代目なら見とがめられることなく、賭場に入れるんです」

まさかと叫んだ團十郎の口を、鶴松が素早く塞いだ。

「大声を出さないでください……そうです、七代目も見たでしょう。

神田寛永寺開山堂の僧侶、法良ほつりようです。あなたがあの男になりすまし、

法良として賭場に入る。自分でも言っていたはずですよ。どうしておれがあそこにいるんだと」

鶴松の肩が震えている。笑いを堪えているようだった。

「瓜二つとは、七代目と法良のためにある言葉ですよ。入れ替わったところで、気づく者などいるはずありません」

「おめえは他人事だから笑っていられるだろうが、おれの身にもなつてくれ。こう見えて、気が弱いんだ。罪人に奉行所へ行けつてい
うのか？ そいつは無理な注文だろう」

あの法良という僧侶が七代目とそっくりだというのは、神田界限かいわいではよく知られた話なんです、と涼しい顔で鶴松が先を続けた。

「まだ修行の身ですから、表に顔を出すことはあまりありませんが、あれだけの色男ですからね。一目見たら忘れられないでしょう。女性の中には、毎日開山堂参りをしている者もいるそうです。せめて顔だけでも拝みたいということなんでしょう。女泣かせなところも、あなたとそっくりだ」

あの坊主の面つらがおれと似ているのは認める、と團十郎は唇をすぼめた。

「賭場にいる客も、法良だと信じ込むかもしれねえ。だが、そこからどうしようっていうんだ？ おれが買った陰富札が当たっていりやあ、百万両が総払いになるだろうが、そんなことが起きるはずも

ねえ。湯島千両富では六万枚の富札が売りに出されるとおめえは言
つてたよな。六万枚だぞ？ その中に留め突きの当たり籤は一枚だ
けだ。そいつを当てられるぐらいなら、こんなところでうろろうろし
てねえよ。毎日毎晩、吉原で遊び歩いてるさ」

加茂川の水、双六の賽、山法師、これぞ我が心に適わぬもの、と

鶴松が有名な白河天皇の言葉を口にした。

「白河天皇でさえ、双六の賽は思う通りの目を出せませんでした。
六万枚のうち一枚しかない留め籤を当てることなど、わたしたちに
できるはずありません。ただ、手はあります。当たり籤を作れば
いいのです」

おれは降りる、と團十郎は裾を^{すそ}からげた。目の前でにこにこ笑っ
ている鶴松の顔が、化け物に見えていた。

「何を言っやがるんだ、おめえは。どうかしてるんじゃないのか。
まるで意味がわからねえ」

「知っている店があります」

茶でも飲んでひと息入れませんか、と鶴松が歩きだした。わから
ん、とひとつ首を捻って、團十郎はその後に続いた。

鶴松が入っていったのは、くるま屋という茶屋だった。愛想のいい老夫婦が営んでいる店で、漉茶こしちやと団子が売りのようである。

もとは水茶屋でした、と鶴松が店の表にあった縁台に腰を下ろした。水茶屋、と團十郎は口元をへの字に曲げた。

江戸初期における茶屋は、単に地面に筵むしろを敷いてお茶を出すというだけの簡素なものだったが、次第に店という形を取るようになり、気軽な休憩所として庶民の憩いの場となっていくた。

五代將軍綱吉の頃、江戸の茶屋は数千軒に達したが、そうなる到店々の間で競争が起き、さまざまな手段を講じて客を集めなければならなくなった。

この時最も重視されたのは、茶や団子の味ではなく、看板娘だった。若く美しい町娘を雇えば、それだけで客が増えたのである。このような形態の店は水茶屋と呼ばれ、一般の茶屋と区別されていた。ところが、客と関係を持つ娘が出てくるなど、風紀を乱すという理由で、天保十二年、老中水野忠邦の命により、すべての水茶屋は営業禁止となった。天保の改革によって、多くの者が職を失ったが、水茶屋もそのひとつだったのである。

水茶屋で働く娘たちの中に、春をひさぐ者がいたのは事実だが、ほんの一部に過ぎない。後世、天保の改革が暗い印象を与えることになるのは、庶民のささやかな楽しみさえ許さないという水野の峻烈しゅんな性格によるのだろう。

「爺さんと婆さんのいれたお茶だと思うと」どうも旨くねえ、と團十郎は深いため息をついた。「いいじゃねえかなあ、おれたちだつて娘つ子をどうしようしてわけじゃねえ。愛でるためにいてくれりゃ、それで良かったんだ。何から何まで雁字搦がんにがらめにしやがつて」その話は後にしましょう、と鶴松が小ぶりの湯呑みを手に取った。

「今は陰富の話です。当たり籤を作ればいい、とわたしは言いました。意味がわからないと七代目がおっしゃるのはもつともです。詳しく話しますから、よく聞いてください」

聞くだけだぜ、と團十郎は体を前に傾けた。富籤と陰富には大きな違いがあります、と鶴松が口を開いた。

「寺社での正式な富籤興行では、好きな富札を買うことができます。寺社に出向き、社務所などで何枚買うかを伝えると、係の者が適当に選んで富札を渡すだけです」

「そんなこたあ、誰だつて知ってる」

陰富は違います、と鶴松がひと口茶を飲んだ。

「客は胴元に対し、自分の好きな番号を指定することができます。」

それが最も大きな違いです」

陰富が流行したのは、いちいち寺社に出向くことなく、簡単に富札を購入できる利便性のためだったが、番号を自由に選べることも人気の理由のひとつであった。

これは陰富の胴元側の事情に因^よるもので、湯島千両富のような大規模な富籤興行の場合、販売される富札の枚数は六万枚以上である。正式な富籤と同じように売るためには、六万枚の陰富札を用意しなければならぬ。

当時の印刷技術で、それぞれ番号の違う六万枚の富札を刷ることは、事実上不可能だった。どこの寺社でも、手書きで富札を作っていたのである。

無論、一人で六万枚の富札を手書きすることはできない。大勢の僧侶、神職の者が駆り出され、富札に番号を書いていくのだが、修行として同じ書体で文字を書くことを日課にしている者でも、どうしても筆跡が違ってくるので、富札を偽造する者が出てくる恐れがあった。

その対策として、朱印を押すことで、正式に寺社が発行した富札であるという証^{あか}にした。現在も御朱印帳に寺社が独自の印を押すが、それと同じである。

ところが、陰富の場合、そういうわけにはいかない。そもそも手

書きで六万枚もの陰富札を作ること自体、できるはずもなかった。

どんな胴元でも、それだけの人数を集めることは不可能である。

手間を省くには、客が指定する番号を書いて渡すのが一番速く、簡単だった。

客の側も、その方が楽しみが増すという利点があった。当たり札の番号を予想するという楽しみである。

現在でも、数字選択式全国自治宝くじ（ナンバーズ、ロトなど）のように、購入者が申し込む数字を自由に選べるタイプの宝くじがあり、過去の傾向を調べることで次の出目が予想できると考える者は少なくない。そのための雑誌まであるが、陰富においても事情は同じで、運やまぐれではなく、確率計算を試みる者、それ自体を楽しみとする者がいたのである。

また、例えば馬券や舟券を買う者が、自分の誕生日や縁のある数字、あるいはテレビや雑誌などで取り上げられたラッキーナンバーを使うことがあるが、その辺りも同様である。末広がりを意味する八が好まれ、忌み数字である四や九は避けられる傾向があった。

誰でも好きな数字があり、験げんをかつぐ者がいるのは今も昔も変わらない。ひとつの数字に固執する者も少なくなかった。

陰富においては、希望する番号の陰富札を購入することができたので、それも人気を呼ぶ一因となっていた。

「ですから、当たり籤を作ることができるのです」

おめえはけつつから物を言う悪い癖がある、と團十郎は顔をしかめた。

「どういう段取りで当たり籤を作るのか、そこを話してくれねえと、おれにはさっぱりわからねえ」

よく言われます、と鶴松が月代さかやきの辺りを強くこすった。

「では最初から。師走の湯島千両富では、六万枚の富札が売り出されます。いろはにほへとや、一から十までの数字を組み合わせただけではとても足りません。湯島千両富では、六つの組を作るのが慣例です」

「福祿寿ふくろくじゆに松竹梅」有名な話じゃねえか、と團十郎は湯呑みに手をかけた。「それぞれ一万枚と聞いたことがある。その次の段は、いろはにほへとちりぬ、の十文字だ」

それが千番台です、と鶴松がうなずいた。

「その下に一から十までの数字が続きます。これが百番台で、そこからまたいろはにほへとちりぬ、と分かれ、これが十番台となります。最後に、もう一度十までの数字が入ります」

図にした方がわかりやすいでしょう、と鶴松が帳面に文字を書き込んだ。

万の位 ↓	福、禄、寿、松、竹、梅
千の位 ↓	い、ろ、は、に、ほ、へ、 と、ち、り、ぬ
百の位 ↓	一、二、三、四、五、六、 七、八、九、十
十の位 ↓	い、ろ、は、に、ほ、へ、 と、ち、り、ぬ
一の位	一、二、三、四、五、六、 七、八、九、十

「例えばですが、留め突の当たり籤の番号は、福のい組、一のろの二、ということになります」

頭がこんがらがってきたと呻いた團十郎うめに、組み合わせは客が選べますと鶴松が言った。

「富籤興行では、勧進元である僧侶、または神主が富箱を突きます。湯島天満宮は神社ですから、神主もしくは神官がその役目を務めることとなります」

「それで？」

「湯島千両富には古来からの作法があり、まず福禄寿松竹梅の富箱を十回きり錐で突きます。最初に突いた札が一番富の頭となり、最後、

十番目に突いた札が留め籤の頭になります」

おれも見ることがある、と團十郎は言った。

「そうやって万の位を決めてから、千の位、百の位と同じことを繰り返すんだよな？　だが、そこに細工はできねえだろう」

もちろんそうです、と鶴松が小さくうなずいた。

* * *

富籤は神事である。おみくじ、つまり神籤が元だから、当然だろう。

神事であるため、不正は許されない。当たり籤の番号を決めるのは僧侶や神主ではなく、もちろん寺社奉行でもない。あくまでも神の意志なのである。

現実的に考えても、不正があつてはならなかった。富籤は神事であるが、同時に賭博なのである。

客は命の次に大事な金を賭けている。不正があつたとわかれば、暴動が起きてもおかしくない。

現代でも、競馬、競輪、オートレースなどで判定が曖昧あいまいだった場合、客が怒り出す例は枚挙まいきよに暇いとまがない。過去には判定を不服とする客が競馬場に放火した事例もあつた。

富籤の場合、不正とは意図的に突く札を操作することである。一種のいかさまだが、それを防ぐためにさまざまな措置が講じられていた。

寺社の大小にかかわらず、あらゆる富籤興行には必ず吟味役がつき、集まった客たちの前で富箱の中を改め、何も入っていないことを示した上で、突き札を入れていくのが定法である。

更に、富箱を何度も引つ繰り返し、突き札を十分に掻き混ぜ、番号の偏りかたよがないようにするが、これもいかさま防止のために必要な手順だった。

吟味役は寺社奉行から派遣される。寺社側の監視役もついた。富札を突く者も交替制である。全員が結託すれば、番号の操作は可能だが、条件として非常に厳しいのは言うまでもない。

富籤興行は寺社奉行の管轄下にあり、主催、運営は寺社側が行う。官民合同事業であるため、買収その他の手段で関係者全員をいかさまに参加させるのは、ほぼ不可能に近い。

もし一度でもいかさまがあったという噂を立てば、その寺社での富籤興行は即刻禁じられた。それ以前に、客が寄り付かなくなるだろう。

誰にとっても不利益であるため、江戸期を通じ、幕府が認可した富籤興行でいかさまが行われた例はほとんど記録に残っていない

ない。それほどいかさま対策が整っていたということでもあるの
だろう。

* * *

「だが、おめえは当たり前籤を作ることができると言う。どうすりや
そんなことができるのか、教えてくれねえか」

できるはずがねえと手鼻をかんだ團十郎に、富籤と陰富は違いま
すと鶴松が言った。

「何が違うっていうんだ」

場所です、と落ち着いた声で答えた鶴松が帳面を開いた。

「富籤興行は寺社の境内で開かれます。集まった大勢の客の前で富
札を突き、その番号を吟味役が大声で伝えます」

「そりやそうだろう」

「ですが、陰富ではそれができません」寺社と賭場の場所が離れて
いるからです、と鶴松が帳面に図を描いた。「師走の湯島千両富は上
野の湯島天満宮で開かれます。そして鳥居の陰富の賭場は、八丁堀^{はっちやうぼり}
の南町奉行所にあります。その間、約二里（八キロ）。走ったとし
ても、半刻（一時間）近くかかるでしょう。それが狙い目です」

まだわからんと首を振った團十郎に、湯島天満宮で富札を突いた

のが暮れ九つ（午後十二時）としましょう、と鶴松が数字を書き込んだ。

「その知らせが南町奉行所に届くのは、早くても半刻後の暮れ九つ半（午後一時）です。この半刻を使って、当たり籤を作るのです」

少し読めてきた、と團十郎は茶をひと口飲んだ。

「面白えじゃねえか。続きを聞かせろ」

「本来でしたら、富籤の留め籤、その他の当たり籤の番号は、瓦版かわらばん屋が伝えます」

江戸時代、富籤の当選番号の発表は、瓦版屋が広めるのが一般的だった。籤の購入者が富籤興行が催されている寺社に出向き、その場で発表を待つことが決まりだったが、現在と違い富籤の価格が高額だったため、複数の者が金を出し合って買うことも多かった。寺社へ出向くのは代表者のみで、他の者は瓦版を買うことで当たり籤の番号を知るのである。

簡単な一枚刷りの当選番号だけが書いてある瓦版が町の辻で売られるのは、早くてもその日の夕方、通常は翌日発売である。感覚としては現在でいう号外に近い。

ですが陰富の場合、客は翌日まで待ってくれませんか、と鶴松が言った。

「多くの胴元は、人を雇って当たり籤の番号を調べます。留め籤だ

けが当たり籤ではありません。大きな富籤興行なら、二、三十本あるでしょう」

おはなし屋か、と團十郎は茶を飲み干した。

江戸の町にはさまざまな職業があつたが、おはなし屋、御話売はその中でも特殊な稼業と言えるだろう。

幕府公認の富籤は、販売所が寺社と決まっている。いちいち買に行くのが面倒な者は陰富をするしかない。前にも触れているが、正式に認可された富籤よりも、陰富で動く金子の方が多かったほどで、客は江戸八百八町の至るところにいた。

陰富の胴元が、客の一人一人に当たり籤の番号を触れ廻ることはできない。非合法の博打のためだが、そこで御話売が登場する。「おはなし、おはなし」と町の辻に立って、当たり籤の番号を教えるのがその仕事である。

陰富をしている客のための通知役だから、目立つことはできない。「おはなし、おはなし」と枕を振るのも、ただ話をしている風を装うためである。

御話売が陰富組織の一員だと町奉行もわかっていたが、末端に位置するだけの小者だから、いちいち捕まえていてもきりがなない。代わりになる者はいくらでもいたから、放っておくしかなかった。

「鳥居もおはなし屋を使っています」それは間違いありません、と

鶴松が湯呑みに触れた。「ただ、それが誰なのか、何人いるのか、その辺りはまだわかっていません。湯島千両富では、万の位から一の位まで、十回ずつ富箱を突きます。位が変わるたびに富箱を交換しますが、その間に湯島天満宮の境内にいるおはなし屋が南町奉行所へ向かうことになっているでしょう。それを足止めし、本当に突いた札が松であっても福、寿であっても竹というように、わたしたちが決めた番号を南町奉行所にいる鳥居に伝えれば、当たり籤を作ることができるのです」

開いた口が塞がらねえ、と團十郎は顎を押さえた。

「つまり、こういうことだな。おれたちはてめえで決めた番号の陰富札を鳥居から買う。実際の当たり籤が何であれ、そんなこたあ関係ねえ。おはなし屋をふん縛じばつてでも足止めして、その間におれたちの決めた番号をおはなし屋ふんに扮した誰かが鳥居に伝える。それで一丁上がりってわけだ」

他に当たり籤を作る方法はありません、と鶴松がお茶のお代わりを頼んだ。

「ただ、今話したように、ひとつだけ問題があります。誰がおはなし屋となるのか、人数さえわかっていません。湯島天満宮は五万、十万人の出となるでしょう。出入りも勝手です。神社を出て行った者を全員追いかけるわけにもいきません。おはなし屋の顔と名前が

わからなければ、この手は使えないのです」

「どうやって調べるつもりだ？」

策はありません、と鶴松がうつむいた。話が違うじゃねえか、と團十郎はその肩を突いた。

「おはなし屋を足止めしなけりや、どうにもならねえだろう。あれだな、おめえの考えは絵に描いた餅ってやつだ。どんなに美味そうでも、食えなきや話にならねえ。暇つぶしにはなったが、この辺でおめえとは——」

昨日まではそうでした、と顔を上げた鶴松が團十郎の太い腕を挿んだ。

「あらゆる手を使って、おはなし屋が誰なのか調べましたが、どうにもなりませんでした。ですが、昨日あなたを見つけたことで、流れは大きく変わりました。十日後、表向きは別の名目ですが、湯島千両富の陰富について、鳥居が会合を開きます。集まってくる客は、わたしたちが目をつけていた大名、旗本、御家人たち。その中に例の法良という僧侶もいます」

「待ってくれ」

片手を上げた團十郎に、そうです、と鶴松が大きくうなずいた。「あなたが法良となって、その会合に出てもらいます。そこで湯島千両陰富について、話し合いが行われるはず。七代目、今こそ

江戸一の歌舞伎役者の本領を發揮してください。わたしの代わりに目となり、耳となって、細大漏らさずすべてを調べてきてほしいのです」

「おれが法良ではなく、市川團十郎とわかったらどうなる」

無言で鶴松が首に手を当てた。陽に雲がかかり、二人の間を冷たい風が吹き過ぎていった。

(つづく)